説教20200517　イザヤ45：11-13　ヨハネ15：9-17　352　361　194

「とどまる愛」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。どうか私たちの心をしずめ、あなたの声を聞くことが出来るようにして下さい。

　本日の説教題としました「とどまる愛」とは、先ず、私たちが主イエス・キリスト様の愛に抱かれそれに留まっているということです。そしてわたしたちがイエス様から受けたその「とどまる愛」も、イエス様ご自身が父なる神からお受けになった無限の愛です。そして私たちはその「とどまる愛」を次の世代に受け渡そうとしています。そのことはヨハネ福音書１５章１６節「あなた方が出かけて行って実を結び、その実が残る様に」という箇所に記されています。その実が残るというのは、その実が私たちの子供たちに留まるという意味です。

　先週、今年度の別府不老町教会の年度目標についてご説明しましたが、言い尽くせなかったことがありますので、再びその聖書箇所、申命記６章１－２節に聞きたいと思います。２節に「あなたもあなたの子孫も生きている限り」とありますので、主なる神は、私たちが主なる神の掟を子供たちに守るようにと教えて、それを子供たちに受け渡すことによって、私たちが**代々に**長く生かされるようになれと計らっておられるのです。そしてその掟とは私たちが互いに愛し合うことなのです。

　私たちの子供たちが教会に集められ、代々に主なる神の掟を守り、互いに愛し合うようになることは、私たちの一致した願いです。しかしながら、その願いがなかなかそのとおりにならないことを、私たちは成ります様にと主なる神に願い続けています。

　私たちは本日の聖書箇所に静かに聞いていけば、その道筋が少し見えてくるように思われます。どうか今、聖霊なる神がわたしたちを満たし、その道筋を照らし出して下さいますようにと祈り願います。

　この世には愛という言葉があふれています。人類愛、人間愛、家族愛、兄弟愛、隣人愛博愛、愛情、恋愛、偏愛、自己愛、無償の愛、無限の愛など、次々と挙げられます。そのような多くの種類の愛が氾濫する中で「留まる愛」を次の世代に教えて伝えていくことは確かに難しい事かも知れません。留まる愛とは、必ずしも激しい抱擁を必要とはしません。ドラマチックな展開を求めるものでもありません。そうではなくて、ただイエス様からの愛に恵まれて、それに静かにわが身を委ね、主なる神の無限で無償の愛を恵みとして受け取りその愛に抱かれることです。

　では本日の新約の聖書箇所に入ります。イエス様は私たちに、「留まる」という言葉を何度も使って、私たちがイエス様の愛の内に留まるべきことを勧告しておられます。そして、わたしの掟を守るなら、わたしの愛に留まっていることになる、と説明なさいます。

この「掟を守る」ということと、「愛に留まる」ということには共通点があります。どちらも私たちの行いにある**限度**を設けているということです。それは主なる神がヨブに対し「しかし、わたしはそれに限界を定め／二つの扉にかんぬきを付け 「ここまでは来てもよいが越えてはならない。高ぶる波をここでとどめよ」とお命じになった（ヨブ記38：10～）ことと似ています。私たちはイエス様の無限の愛を受けていますが、私たちが無限の愛をもって互いに愛し合うことは出来ません。私たちがイエス様のように地上のすべての人を愛することが出来るでしょうか。私たちは、我が子から片時も目を離さずに、その全生涯にわたって見守ってゆくことが出来るでしょうか。残念ですがそれは限りがある私たち人間には無理なことでありましょう。　幸いなことにイエス様は、私たちに限度があることを認めて下さり、そうして私たちの行うべき愛の限界を１３節にはっきりと示していて下さいます。１３節をお読みします。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」イエス様はご自身が私たちの罪のために、その命を墓場に横たえられたことを指してこのように言われました。１３節をギリシャ語の原文に忠実に訳しますと次のようになります。「友のために自分の命を横たえることよりも大きな愛を持つことは誰にも出来ない」となります。つまりイエス様はご自身の無限の愛を、十字架を指し示すことによって、その輪郭を明らかにして下さり、限りがある私たちが行うことが出来る具体的な愛の形として示されたのです。

　イエス様は私たちがお互いに行うことが出来る最も大きな愛は、友のために自分の命を横たえることだと言われました。ここで私たちはその大きな愛を、高ぶる愛と誤解しないようにいたしましょう。そもそも私たちは大きいことが小さいことよりも偉大で優れていると考えてしまう**罪な**傾向を持っています。しかしイエス様が十字架に架かられたのは、この世で最もさげすまれ小さくされた罪人としてでありました。イエス様は私たち人間の低きところまで下って来られました。しかも最も低いところまでその身を落とされたのでした。その小さくされた者の愛が、大きな愛と呼ばれるゆえんは、ただイエス様が父なる神の愛に自らを委ねきって、その死が栄光への道筋であることを完全に悟って献身されたからです[[1]](#footnote-0)。イエス様は次のようにも言われます。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば多くの実をむすぶ」と。

　イエス様にとって、小さいことを大切にすることが大きな愛を行うことでした。エマオへの道を歩む二人の弟子たちに付き添われた復活のイエス様は小さい姿で現れて、二人にはそれがイエス様であることが分かりませんでした。しかしいつしか二人はイエス様の大きな愛によって心燃やされていたのでした。またイエス様は最も小さくされた兄弟姉妹に対して、彼らが窮しているときに食べさせ飲ませ、宿を貸し、そして服を着せて、病気の時に見舞うことが、すなわち私にしてくれたことであると言われました。

　このように私たちは日常生活の小さな出来事のなかでも、友のために自分の命を横たえることが出来ます。具体的に云えば、あなたが愛する人に愛を告白して、もし振られたとしたらあなたはその時、打ち砕かれてその人のために命を横たえることになるでしょう。しかしイエス様は決してそんなあなたを決して一人にはされず、むしろこれまで以上にあなたに近くなり、そして「留まる愛」を教えてくださるのです。あなたの大きな悲しみはやがてイエス様によって大きな喜びへと変えられるのです。

　私たちは、十字架に示されている主なる神の大きな愛に向かって、日々の小さな出来事の積み重ねの内に「留まる愛」を増し加えられているといってもいいでしょう。私たちは、自ら「留まる愛」をつくりだすことは出来ません。なぜならばそれは主なる神の無限の愛だからです。しかし、私たちは、日々の小さな出来事の中で「留まる愛」を増し加えられて、身を持ってその愛に生かされる証し人となって、喜んでその愛を子供たちに伝えていくことが出来るのです。そのためにイエス様は私たちをお選びになったのでした。

　心身障がい者の皆さんとともにラルシュ共同体という愛の共同体をフランスから世界に広げたジャン・バニエという人は、施設において日々、愛し合う暮らしを次のように語っています。「イエスが来られるのはカミナリやイナズマの中ではありません。夕暮れの涼しい風の内にイエスは来られます。聖霊はこんなにも静かに、わたしたちの大地の上を吹きすぎていきます。注意を払わなければ私たちは、私たちのうちにあらわになる神の存在に気が付かない恐れがあるのです。というのも神は穏やかであり、やさしく愛する神であり、来られて命を与えたもう、その仕方は誠に静かだからです。それは人間の自負とか巧妙の世界からはほど遠く、駆け引きや報酬の世界でもありません。権力や管理の座からもほど遠く、自己満足や自己防衛、自信過剰の安全策などとは無縁であり、私たちの存在の奥まったところに神は隠れておられるのです[[2]](#footnote-1)。」

今、殊に、障がい者施設、介護老人施設、児童養護施設などの各施設で、互いに愛し合う日々を過ごしておられる方々のことを覚えます。

私たちは、イエス様の愛に留まる時、同時に私たちの最も傷付きやすく感じやすい心と直面することになります。私たちはイエス様の愛に身を委ねて、自己防衛や人間的な駆け引きをすることを止めるとき、お互いの交わりの喜びが深められると同時に、どうしても傷つけあわないではおれない人間の罪の問題と直面せざるを得ません。そんな時、わたしたちはどうしてもその問題を人間的にうまく処理して、傷つく痛みを回避した形で、再び平常に戻ろうとしがちです。

　しかし私たちはそこで静かにイエス様の言葉に耳を傾けましょう。イエス様は十字架を指し示して、「友のために自分の命を横たえることよりも大きな愛を持つことは誰にも出来ない」と言われます。十字架には神様の最も大きな、無限の愛が示されています。私たちはその神様の愛に留まっているとき、実際に、お互いに愛しあうことが十分に出来るようになります。そして自らが打ち砕かれる痛みが、やがて永遠の喜びへと変えられることを知るのです。

　お祈りいたします。

ご在天の私たちの父なる神様、今日、御前であなたを礼拝賛美できます幸いに感謝します。私たちはあなたの無限の愛に留まって、お互いに愛しあうものとされていますことを本当に感謝いたします。私たちが人々に仕え、弱い人を助け、倒れた人を起こし、苦しんでいる人を慰め、友のない人の友となれますように、わたしたちを、あなたの愛のうちに励まし新しくしてくださいますように。

　ことにこの世で弱い立場にある人たちが暮らす各施設を顧み聖霊の励ましと導きを与え、そこに暮らす人たちが、お互いに愛しあう技を祝福して下さい。

　今、多くの方々がご自宅にてあなたを礼拝賛美しています。どうかすべてのご家族に主の愛を満たして下さい。家族が助け合って恵みの道を歩み、ともに生きる喜びを、次の世代に伝えることが出来ますように。

　父と聖霊とともに一体であって代々に生き支配されておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。

1. ナウエン『この杯が飲めますか』P.47 [↑](#footnote-ref-0)
2. ジャン・バニエ『ひとつとなるために』pp.189 [↑](#footnote-ref-1)